スポーツ児童文学、大人と子どもの関係性からみえてくるもの

藤田のぼる

1

今回、僕に課せられたテーマは、スポーツを題材にした児童文学作品の中で大人と子どもの関係性がどのように意識され、描かれてきたかという問題である。

スポーツにおける（子どもにとっての）大人といえば、まず考えられるのは監督、コーチといったスポーツの指導者であり、もう一つが子どもを励まし、支える家族という構図だろう。僕などの世代では、なんといっても思い出すのは、その二つを強烈にくっつけた「巨人の星」ということになるだろう。『少年マガジン』に連載されたのが一九六六年から七一年、僕は高校生から大学生の時で、ほぼリアルタイムで見ている。一時代も二時代も前のような親子関係をベースにしているところが、ある種パロディーのようでもあり、失われていく父権への郷愁のようなものも、背景にはあったかも知れない。まあ、ばかばかしいと思いつつ、食堂などで毎回見ていた。

そして、「巨人の星」へのアンチテーゼのように、一九七二年に現れたのが、ちばあきおの「キャプテン」だった。こちらの掲載誌は、月刊の『少年ジャンプ』である。舞台は東京下町の墨谷二中、二年生で転校生の谷口が主人公である。野球部に入ろうとするが、前の学校のユニフォームを見て、部員たちが驚く。名門青葉学院のものだったからだ。二軍の補欠だったのだが、青葉の野球部ということですっかり「誤解」されてしまった谷口は、その誤解に応えるべく特訓を繰り返し、徐々に実力をつけていき、三年生の引退と共に、次期キャプテンとなるのである。谷口キャプテンのもとでめきめき力をつけた墨谷二中は、青葉学院ともいい勝負をするほどになっていくのだが、驚いたのはその先だった。物語は主人公・谷口を追いかけるのではなく、墨谷二中に留まるのである。そして、主人公は、次のキャプテン丸井になり、イガラシ、近藤と、四代にわたっ